

☆医療ケア必要な子の避難は…不安解消へ連携、北九州市で初の訓練

医ケア児の個別避難計画（上） 【西日本新聞 me】 2021/12/9

<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/844356/>

＞ 北九州市で、日常的に人工呼吸器などを使う在宅の子どもと家族の災害時個別支援（避難）計画づくりが本格化している。モデルケースとなった一家の初めての避難訓練が11月にあり、支援者らが手順や課題を検証した。策定の主体は医療や福祉の事業所など官民でつくる「北九州地域医療的ケア児支援協議会」。避難先や手段の確保が難しい人たちの「万が一」を地域で支えていくヒントとは－。2回にわたって報告する。

ベッドですやすやすと眠る山田陽奈子ちゃん（2）をそっと抱き上げ、バギー（大型の車椅子）に移す。19日午後、同市小倉南区の集合住宅2階。人工呼吸器などを着けたまま移動する手順を確認しながら準備を終え、母の昌子（しょうこ）さん（39）はリュックを背負った。

母一人では難しく

医療機器類、ミルクや水、衣類…。通院で出掛けるだけでも移動は一苦労だ。災害で停電すれば、機器類を駆動させる充電バッテリーも必要となる。自宅は近くに紫川が流れ、2・4メートルの浸水が想定される区域にある。近くに知人や親戚はいない。父の英之さん（36）は「仕事で自分がないときに災害に遭うのが一番心配」。この日は、そばで見守り役に徹した。

難病や合併症を患う陽奈子ちゃんは生後1年4カ月の入院を経て、今年4月末から自宅で暮らす。「各地で水害や地震が頻発しているのが不安だった」昌子さんが、退院時に病院のソーシャルワーカーなどに相談したのを機に、協議会とつながった。「やはり人手と電源が確保できる避難先があるのか、一番気になっていました」（英之さん）

支援名簿の対象外

玄関のチャイムが鳴る。現れたのは、同区内で児童発達支援事業所などを運営する株式会社「フィールド」社長の末永敬一さん（42）。避難情報が出されたとの想定で昌子さんから電話で連絡を受けた。

在宅の医療的ケア児（医ケア児）が増えていることから、協議会は2年前に発足。趣旨に賛同する小児科医、福祉事業所や医療機器メーカー関係者ら約100人規模の「ネットワーク連絡会」も立ち上げ、末永さんもメンバーの一人だ。

さまざまな医療機器が必要な医ケア児が一般の避難所で過ごすのは事実上、困難。同市は医ケア児について、自治会などを中心に避難態勢をつくる「避難行動要支援者名簿」の対象にしておらず、近隣住民からの手助けも見通せない。

協議会側が連絡会メンバーに「避難時の手伝い」を募ったところ、末永さんと歯科医、訪問看護師の計3人が手を挙げた。距離や動きやすさを考慮して「優先順位」を付け、今回は一番近い末永さんが駆け付けることになった。災害時には同じ「被災者」となる「支え手」探しは容易ではない。あらかじめ「実行部隊」となり得る多職種のネットワークを結成していたことが功を奏した形だ。

「前日にお母さんと打ち合わせし、事業所で待ち構える形ですぐ出発できたのでスムーズでした」と末永さん。荷物を詰めた三つのスーツケースを手際よく福祉車両に運び込み、陽奈子ちゃんと昌子さんを乗せ、避難先まで走らせた。

「ただ実際の災害時はこちらの利用者への対応もあるので、10分～15分は待ってもらわなければならない。必ず福祉車両が使えらることも限らない。

たとえ空振りでも

快晴の下、陽奈子ちゃんを乗せた車は約5分で同区の特別養護老人ホーム「とくりき春吉園」に到着した。同園は陽奈子ちゃんの自宅近くで避難先を探していた協議会側からの打診に応じ、一家を受け入れることにした。診療所も併設する地域密着型の施設で、入所者は計39人。近隣の高齢者を想定した福祉避難所として市と協定も結んでいる。

親子は、エレベーターで4階の小ホールに案内されて一息。家を出てまだ15分ほどだった。ボランティアとして手を挙げた職員と誘導した浅尾美子施設長は「警報などが出るのを待たず、空振りでもいいから余裕を持って明るい時間に避難してもらえれば、受け入れ側も安心」と話す。職員たちは、災害時は特に、他の入所者たちの安全管理が必要になるためだ。

支援者側の準備、避難のタイミング…。試行錯誤を続けながら、まずは台風など予測可能な災害時の避難態勢を確立することが、地震など不測の事態に対応する一歩となる。協議会の調査によると、市内の医ケア児は167人。うち災害警戒区域に住む17家族を対象に、個別支援計画を策定していくことにしている。

一度も目を覚まさず、穏やかだった陽奈子ちゃん。昌子さんは「実際は荒天や焦りでもっと時間はかかるだろうけど…。荷物の量も含めて、自分なりの目安が分かって良かった」とほっとした表情。英之さんは「多くの人の力を借りる必要があり、本当にありがたい。どこに住んでいる医ケア児の家族も安心できる避難態勢がととのってほしい」と語った。（編集委員・三宅大介）



父の英之さん（左）が見守るなか、バギーで寝ている山田陽奈子ちゃんと福祉車両に乗った母の昌子さん（右）。末永敬一さん（中央）が支援した＝11月19日、北九州市小倉南区